片山楊谷《猛虎図》三幅対のうち左幅 個人蔵

山本梅逸《花卉草虫図》名古屋市博物館蔵（展示期間 4/6-5/6）

C'n scene news

VOL. 85

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

［編集・発行］
〒 260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8
TEL. 043-221-2311　FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
http://www.ccma-net.jp/
［発行日］2018 年 3 月 31 日
［印　刷］株式会社恒陽社印刷所

特集
百花繚乱列島－江戸諸国絵師めぐり－
2018.4.6 ▷ 5.20
岡本神草の時代展
2018.5.30 ▷ 7.8

所蔵作品展「千葉が生んだ浮世絵の祖　菱川師宣とその時代」
2018.4.6 ▷ 5.20

館長のつれづれだより　「加曽利貝塚の国特別史跡指定を受けて」

美術館の仕事を紹介します！　その１：学芸員①「作品調査」

友の会 バスツアー報告

館長のつれづれだより　加曽利貝塚の国特別史跡指定を受けて

千葉市美術館は、1995 年の開館から数えて新年度で 23 年目を迎えます。

お陰様で、現在では、全国的に見ても一定の高い評価を受けるに値する美術館に成長したと言えます。これも日ごろからの皆さまの暖かいご支援とご協力によるものと、まずはお礼を申し上げます。

皆さまにはすでにご存じのことと思いますが、当館には、2020 年の完成に向けて拡張の計画があります。1 階から 11 階まで、全てのフロアーが美術館の施設となるのです。現在、それに伴う設計の準備が進んでいます。拡張される部分には、所蔵品の常設展示、親子参加のワークショップ、子供たちが遊びながら美術に親しむことの出来るスペースなど、入館者参加型の施設としての充実が図られるほか、教育普及事業にもさらに力を入れ、千葉市の掲げる「文化振興」や「生涯学習」等の実を上げる所存です。どうぞご期待ください。皆さまからのご意見もお待ちしています。今後とも引き続き美術館に対するご支援をお願い致します。

ところで、千葉市民にとって昨年の大きなニュースの一つとして記憶されるのが、市内若葉区に遺る縄文時代の遺跡「加曽利貝塚」が国の特別史跡に指定されたことでしょう。約 5,000 年も以前の遺跡というと、わたしたちにとって遠い昔の、現在の生活にはかかわりが薄いと思われる方もおられるでしょう。たしかにそうかもしれません。しかし、決してそうではないのです。実は、縄文時代はいまに続いているのです。わたしたちが縄文人と同じ大地の上に住んでいるということだけではなくです。

まず、文化芸術の世界では、現代美術の旗手であった岡本太郎氏（1970 年に開催された大阪万博の《太陽の塔》を制作した作家です。この塔を修理し再び公開しようというニュースが最近伝わってきました）は、モダニズム芸術の反省として縄文時代の造形（土器や土偶など）を取り上げ、これを高く評価し、論評するほど、自らの芸術創作の刺激としました。縄文の造形から触発され、創作を続ける現代美術家は現在も少なくありません。音楽や演劇のなかにも縄文時代をモチーフとするものを容易に見つけることが出来ます。縄文時代は、遠い昔の、現代人とは関係のないものではなく、現在に続いているのです。

千葉市美術館は、加曽利貝塚の国特別史跡の指定という慶事に呼応して、今に生きる縄文時代、縄文の造形と現代美術といったテーマで、記念講演会・シンポジウムの開催を市の教育委員会と協力しながら計画しています。開催日は、来る 2018年6月3日（日）で、講師には、國學院大学名誉教授の小林達雄氏、英国・イーストアングリア大学教授のサイモン・ケーナー博士、米国・カリフォルニア大学バークレイ校教授の羽生淳子博士、美術評論家で明治学院大学教授の山下裕二氏をお招きするほか、千葉市からも関係者の参加が予定されています。

縄文時代を「いま」に繋ぐ。この企画が、わたしたちの極身近にある国指定の縄文遺跡を、わたしたちが日常の中で活用し、その保存の重要さを実感する機会になるとともに、こうした歴史のある土地、豊かな文化の継承される町に住むことが、千葉市民にとっての誇りとして意識される一つの契機なればと、密やかな期待をしています。ご関心をお持ちの方々のご聴講をお待ちしています。

［館長　河合正朝］

百花繚乱列島

―江戸諸国絵師（うまいもん）めぐり―

GO! GO! 日本のミュージアム！

このたびの展覧会では、全国のご所蔵先からとっておきの作品をご出品いただいています。各地の誇る個性豊かな美術館・博物館はまさに百花繚乱！ぜひ、ご当地のミュージアムを訪れる旅に出かけてみてください。

黒田稲皐《群鯉図》

鳥取県立博物館

鳥取県鳥取市
10/6 ～ 11/11 「鳥取画壇の祖　土方稲嶺」展を開催。

大津市歴史博物館

滋賀県大津市
4/17 ～ 5/20　ミニ企画展「大津絵　れきはく蔵出し展 2018」を開催。

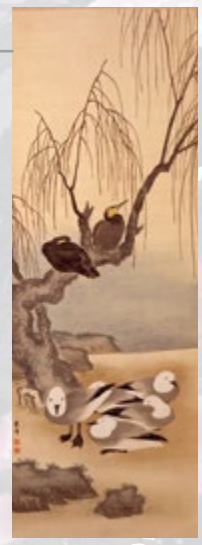
紀楳亭《大津絵見立て忠臣蔵七段目図》

仙台市博物館

宮城県仙台市
大充実の常設展で伊達政宗・仙台藩ゆかりの多彩なコレクションが楽しめます。

瑞巌寺 宝物館

宮城県宮城郡松島町



東東洋《柳に黒白図》

津山郷土博物館

岡山県津山市

東北歴史博物館

宮城県多賀城市

福島美術館

宮城県仙台市
4/17 ～ 12/22 「福島禎蔵が愛し遺したコレクション」を開催。

岡山県立美術館

岡山県岡山市
4/20 ～ 7/1　開館 30 周年記念展「県美コネクション」で岡山ゆかりの作品を多数展示。

大田原市黒羽芭蕉の館

栃木県大田原市

高松市歴史資料館

香川県高松市

栃木県立博物館

栃木県宇都宮市

徳島市立徳島城博物館

徳島県徳島市
9/1 ～ 10/28　秋の企画展「阿波徳島の祭礼絵巻」展を開催。

茨城県立歴史館

茨城県水戸市

林十江《木の葉天狗図》

徳島県立博物館

徳島県徳島市

水戸市立博物館

茨城県水戸市

愛知県陶磁美術館

愛知県瀬戸市

沼田月斎《二美人図》

名古屋市博物館

愛知県名古屋市
4/28 ～ 6/10　企画展「博物館イキ!―22 のテーマで語る魅惑の博物館コレクション」を開催。

徳川美術館

愛知県名古屋市

東京国立博物館

東京都台東区

町田市立国際版画美術館

東京都町田市
4/21 ～ 6/17　開館 30 周年記念展「浮世絵モダーン」展を開催。

早稲田大学會津八一記念博物館

東京都新宿区

所蔵作品展「千葉が生んだ浮世絵の祖　菱川師宣とその時代」

菱川師宣《衝立のかげ》横大判墨摺絵 延宝(1673～81)後期

菱川師宣《天人採蓮図》絹本着色 1幅 元禄(1688～1704)前期

千葉市美術館といえば、浮世絵のコレクションや展覧会でご存知の方も多いようです。菱川師宣 (?-1694) は、浮世絵の始祖と位置付けられるばかりでなく、房州保田（現在の安房郡鋸南町保田）に生まれていることでも、我々に親しい存在の絵師と言えます。千葉市美術館では、平成 12 年に「菱川師宣展」また平成 27 年には「初期浮世絵展　―版の力・筆の力―」でも師宣を大きく扱いましたので、ご覧いただいた方もいらっしゃるかと思います。

保田で縫箔師の父菱川吉左衛門の長男として誕生した師宣は、当初家業を継ぐため、刺繍の技術を学ぶとともに、下絵なども手がけていたようです。縫箔師というのは、主に刺繍をする職人なのですが、現在残されたわずかな作品と文献から察するに、日本絵画の伝統的な図柄を刺繍した掛軸形式の作品を制作する仕事をしていたようです。富津市の松翁院には吉左衛門が制作し、師宣が下絵を描いたと伝えられる刺繍の《釈迦涅槃図》が今も残されていますが、とても立派で大きく、刺繍の技術も素晴らしいものです。

房州で縫箔師の修行をしながら、様々な主題の図柄を学び、素養を身につけたのでしょう。若いうちに江戸へ出て、活気ある新興都市の空気に触れ、そこで見た多くの絵に学ぶうちに風俗画に筆を執るようになったようです。浮世絵の最大の特徴として、版画によって量産されて大衆に至るまで普及し、誰もが絵を楽しむことができるという文化を形成したということがあるかと思いますが、風俗画を版画の一枚絵として流通させることを成功させたのも、師宣であったと言えるでしょう。

江戸での活躍めざましい師宣でしたが、房州への思いも深く、有名な晩年の作品《見返り美人》（東京国立博物館蔵）に「房陽菱川友竹筆」（友竹は剃髪後の名）と署名があるように、自らが房州出身であることを画の中に示すことも多くありました。また亡くなるその年には、故郷保田の別願院に梵鐘を寄進しています。これは太平洋戦争で供出されてしまったそうで、なんとも残念なことです。

さて、今回の所蔵作品展は、師宣とその画風に影響を受けた絵師たちの浮世絵によるミニ特集展示です。師宣が愛した故郷千葉にも心を寄せながら、浮世絵の始祖の活躍ぶりをご覧ください。

［副館長兼学芸課長　田辺昌子］

岡本神草の時代展

The Age of Okamoto Shinso

担当学芸員に聞きました 「若者は、いつの時代も若者。」

現代美術としての夢二に憧れて

若い神草の憧れは夢二から？

最初は夢二ですけれど、我々が今考えている夢二とは違うインパクトを持って当時の若者たちには受け取られていたんですよ。

どんな感じですか？

現代美術でしょうか。夢二の作品は時として、いわゆる通俗的に見られがちなんだけれども、神草たちの世代はちょっと違っていたんじゃないかと。
あと、描き方の新しさ。夢二の絵と出会ってからの神草を見ていると、ああ、いつの時代にもいる、美術を学ぶ若者だな、っていう感じがします。あとは、今では感じられないけれども、夢二自身が大逆事件の周辺にいたこともあって、現実から身を守る世界みたいなものを描いていることに対する共感。受け手の側が具体的に夢二の事情を知っていたわけではないけれど。

神草は画家としてわりとオーソドックスな教育を受けていますね。

美術工芸学校というのは、円山四条派以来の画塾の伝統に近代の学校教育というものがくっついてできたところですね。日本画の場合、そんな雰囲気は 1980 年代ごろの美術系大学にも残っていました。

そのなかで同時代の現代美術としての夢二に出会ったということ？

夢二は、高級な芸術、本来芸術を目指そうとする連中から見たら、それまでなかったもの。同時代の中では別格でしょう。明治後半、日露戦争が終わってから震災くらいまで、夢二の存在は今では想像つかないいろんな意味を持っていたと思いますよ。今日ではデザインに注目されがちになるけれど、例えば構図の取り方とか、エロティシズムとか、いろいろな面がありますよね。

古典からの影響

神草が先行者から受けた影響は夢二ばかりではありません。たとえば、『白樺』なんかが紹介するようになった初期ルネサンスの画家ジョットなどもいます。夢二以外の関心についてみると、はじめは後期印象派なんだけれど、だんだん宗教的なもの、ゴーギャンからクラシックへの動きというのは、『白樺』の紹介していくパターンとほぼ同じですよね。
ただこの《口紅》【図 1】というのは……。

卒業制作ですよね？

そうです。すごく力が入っていて上手い。描かれた女性は屏風仕立てでほぼ等身大に近いんです。我々は立って屏風を見るけれども、結局男目線で描かれている絵なので、手前で寝っ転がって、頬杖をついて見るという感じですね、この絵は。そこで口紅を直しているのを見るというバーチャルリアリティでしょう。屏風と現実の空間はつながっているという画家の明確な意思があります。
《口紅》は現実の空間とつながったものとして出来ているけれど、そこから次に、ジョットみたいな宗教性、宗教的な感情みたいなものを絵に盛り込もうとしたときに、この人は大きな壁にあたったんだと思います。だから《口紅》と、この後に代表作といわれる、未完の《拳を打てる三人の舞妓の習作》【図2】の空間の質は違います。「拳を打てる三人の舞妓」にはいくつかのバージョンがありますけれど、それらには女性の周りの、雲で覆ったというか、薄墨で覆っているような効果が現れている。この人はたぶん、絵画の空間をどうしようか、描かれている女性たちの周りの空間をどういうものにしたかったのか、ということに考えが向かっていた。

宗教画のイメージと「もやもや」

明らかにこの構図は宗教画のイメージだし、しかも、《口紅》の女性とは違う。生々しくはあるんだけれども、それとは別の何かがある。聖と俗を一体にして昇華させたかったんでしょう。そういう点では明らかに異質なんだけれど、正面性よりも描かれている周囲の空間の不思議さを見てください。神草の上の世代の、村上華岳（かがく）でも土田麦僊（ばくせん）でもない。彼らは同じようにヨーロッパの古典絵画に関心を持っていましたが、神草は彼らとは違う空間を作りたかったんでしょうね。今の私たちが見た時には、ちょっと理解できないけれども、「拳を打てる…」以後の絵っていうのは、背景になんだか霧のようなものがすごく多くなってくるんです。

もやもや？ 何でしょうか。

これがすごく疑問です。その中で、それまで《口紅》とか、「拳を打てる…」くらいまでの時には、こちらにびしっと来るリアルなものが、もやの先にいってしまうというか。女性がこう、もやの中でスローモーションになってくる。
この人は制作というのを頭の中で相当突き詰めて考えて行くところがあったようです。ですから「もや」は、絵描きの頭の中そのものだと思った方がいいんじゃないかな。で、それを突き抜けることが出来たか出来なかったかというところで、亡くなってしまった。とても惜しい。

今回の展覧会も草稿が多いと聞いていますが。

結局完成にいたらないっていうのは、やっぱりまだそれだけ若い。頭で作ってしまうんですよね。この後もずっと京都画壇と呼ばれるものは続くけれども、国画創作協会という運動が終わった後、熱気が冷めたような雰囲気がちょっとくるんです。大正期の運動が終わった後に、まわりはどう思ったんだろうな。教える先生も作り手も熱が冷めた瞬間があって。神草が熱を持ち続けて生きていかなければいけなかったとすれば辛いですよね。
この周りのもやもやを、どう生かしていくかというのが、最後まで解決していないですね。岡本神草と長生きした福田平八郎を比べたら、青木繁と坂本繁二郎みたいな感じですよ。
あと、神草が学生のころから関心を持っていた、退廃と崇高なるもの、聖なるものの統合というか止揚のゆくえ。これはもっと見続けたかったと個人的に思います。

リアルなものとフィクショナルなものとの関係

図録をめくっていくと、ポスターみたいな感じがする絵があります。陰影のつけかたとか、日本画らしくないというか。

逆に、何をして日本画というか、でしょうね。

線と、写真から起こしましたか、みたいな。

逆に、リアルさが無くなっているんですよ。「不気味の谷」ってあるでしょう？ コンピューターでリアルを目指していったら…という。この人の後期の絵は、それに近い。それを象徴しているのが、彼女たちの周りにある「もや」なのかもしれない。テクニック、理論、いろいろな点で優れていた彼は、何を目指していたのか。

リアルというか、リアルなものからイメージにいく途中のということですよね。これを本人は求めたのでしょうか。

結局どこに行きたかった。それはわかりません。つまるところ日本画とは何か、今を生きる自分にとっての日本画とは何か、さらには美術とは何かということを思わせる。未完であるがゆえの生（なま）な問題がいろいろあるんじゃないかと思います。

［話し手：上席学芸員　藁科英也］

【図 1】岡本神草《口紅》大正9年（1920）京都市立芸術大学芸術資料館蔵

【図 2】岡本神草《拳を打てる三人の舞妓の習作》大正9年（1920）京都国立近代美術館蔵

美術館の仕事を紹介します！

その1 学芸員①「作品調査」

調査の主な舞台となったキンスキー宮殿（プラハ国立美術館東洋美術部）

フルディム地方美術館の展示室で調査と意見交換を行う

美術館では、いろいろな人々が働いています。

展示室で来館者の皆さんを直接お迎えするスタッフもいれば、裏方として黙々と働くスタッフも。もちろん展示室以外でも様々な仕事があります。

本連載では、当館で働くスタッフの様々な仕事と役割をご紹介します。初回は数ある学芸員の仕事の中から「作品調査」について、ご覧いただきましょう。

美術館に「学芸員」という肩書きの職員がいることは知っていても、具体的にどのような仕事をしているか、ご存じのかたは多くないでしょう。「学芸員です」と自己紹介すると「ああ、美術館の受付にいる…」と言われることがありますが、実は全然ちがいます（笑）。たいていは館のバックヤードにいて、もぞもぞと、傍目にはよくわからない動きをしているのが学芸員です。

学芸員の役目のひとつに、「展覧会を作る」という仕事があります。昔とちがって美術館は、ただ展示を見せるだけではない、さまざまなイベントを開催する場になりましたが、それでも展覧会は館の大切な事業といえるでしょう。展覧会がオープンするまでには長い時間をかけた、入念な準備が必要。そのうち、今回は作品調査についてお話しします。

額縁におさまった絵なのか、見あげるような彫刻か。暮らしを彩る皿や壺か、はたまたきれいな装幀本か—。展覧会にもいろいろありますが、学芸員が共通して頭を悩ませるのは、「何」を集めるか。ある作家の個展にしても、ある時代や様式を切りとるにしても、候補となる作品は無限にあります。最良の、時には新鮮なものを選ぶためには、できるだけ実物を目にしたい。作品調査は、展覧会の土台を固める作業なのです。

かくいう私は、今年の1月から2月にかけて、チェコに行ってきました。2019年度に開催予定の展覧会に向けた作品調査です。訪れた美術館や博物館は6か所、実見した作品は数百点におよびました。写真を撮り、メモを走り書きし、採寸をしながら、たどたどしい英語で現地の学芸員とのやりとりを重ねる日々は、しんどくもあり、楽しくもあり。海外では、美術館のありかたや作品の保管方法など、日本との違いに驚くこともしばしばです。十分なスタッフの数や広々としたオフィスにはうっとり…。可動ラックにガラス製品がむきだしで並んでいる光景は、地震のある日本では考えられません！

調査では、図版ではわからなかった材質感の面白さや消えかけた書き込み、裏面に残された情報、保存状態のよしあしなど、いろいろな発見があります。とりわけスケール感をつかめるのが大きい。資料にデータのあるものでも、実物を見ると意外に大きい（小さい）と思うことはよくあります。この実感から、展示効果を考えつつ、想像上の美術館の空間に作品を並べてゆく—。もちろん希望する作品をすべて借りられるわけではなく、妄想に終わることも多いのですが、このようにして少しずつ、展覧会は形になってゆくのです。

もろもろの事情で調査ができない作品もありますし、まずは調査、という手順があてはまらない展覧会もあります。時間にも予算にも限りがあって、「すべからく実物にあたるべし」は理想論でもあります。けれどもこの作業をできるだけ大事にしたい。作品を見て選んだかどうかは、お客様にも伝わる気がするのです。それに、そうでないと、精細なパソコンのモニターやスマホの画像で満足するのではなく、実物を見るために足を運んでいただくという、美術館の根幹が揺らいでしまいますから。

［上席学芸員　西山純子］

友の会 バスツアー報告

3月20日（火）に毎年恒例の友の会バスツアーが開催され、今回は「神谷伝兵衛と小川芋銭ゆかりの地　牛久」と銘打ち、茨城県牛久市を訪れました。

ワイン王神谷伝兵衛が建てた稲毛の別荘や日本初の本格的ワイン醸造場として開設された牛久シャトー、「河童の芋銭」の異名を持つ小川芋銭が晩年を暮らした雲魚亭、ギネスブック認定の世界一の大仏である牛久大仏を巡りました。

当日はあいにくの雨模様のうえ、寒の戻りで冷え込みましたが、参加された皆様は和気あいあいとした雰囲気で、１日楽しく過ごしていただけたようです。今後もこのような会員向けのイベントを開催していきますので、ぜひご参加ください。

雲魚亭（小川芋銭記念館）

当日の行程
8:30千葉駅前出発→千葉市民ギャラリー・いなげ（旧神谷伝兵衛稲毛別荘）→牛久シャトー（昼食）→雲魚亭（小川芋銭記念館）→牛久大仏→18:15千葉駅前解散

市民ギャラリー・いなげ（旧神谷伝兵衛稲毛別荘）

牛久シャトー「神谷伝兵衛記念館」の様子

牛久シャトー外観

牛久大仏

CCMA

千葉市美術館 友の会は こんなにお得！

◆年会費 2,500 円で何度でも展覧会が見られる！

◆会員の同伴者が割引または無料に。さらに展覧会招待券もプレゼント！お友だちとご一緒に鑑賞してみては？

◆ミュージアムショップやレストランでも割引！

◆バスツアーなど会員限定のイベントも。

その他特典が盛りだくさん。

詳しくはパンフレットをご覧ください。
ご入会を待ちしております。
受付などで配布中しております。